（報告）

高校生が自殺予防教育を『普段の生活に役立つ』と肯定的に回答した＜過去の経験の振り返り＞について

清水惠子[1)]　三澤みのり[1)]

要　旨

本研究目的は、山梨県内 4 高校で 3 年間にわたり計 3 回実施した予防教育を受講した生徒 755 名が、予防教育を『普段の生活に役に立つ』と肯定的に回答し、その理由の記述が分析指標＜過去の経験の振り返り＞(以下＜振り返り＞)に該当したデータの中から、自殺予防につながる知見を質的に検討することである。

結果は、＜振り返り＞に該当したデータ数 200 は全調査の肯定的回答数の 6.4%で、生成された一年目教育後・二年目教育前の＜振り返り＞カテゴリー数 11、二年目教育後・三年目教育前の＜振り返り＞カテゴリー数 10、三年目教育後の＜振り返り＞カテゴリー数 8 であった。これらのカテゴリーは、教材や体験学習をきっかけに、生徒ら自身が過去の自殺願望や身近な人の自死体験を想起し、調査への回答を通して客観視したものであった。生徒らは普段の生活や身近な人との関係性を振り返り、今後の自身や身近な人の自殺予防に役立てようと認識を高めていると考えられた。

キーワード：**高校生、自殺予防教育、調査票、肯定的回答、過去の経験の振り返り**

Ⅰ．研究の背景

１）青少年の自殺の現状

平成 30 年 3 月 16 日、厚生労働省自殺対策推進室と警察庁生活安全局生活安全企画課より、「平成 29 年中における自殺の状況」[1)]について、日本の平成 29 年中における自殺者の総数は 21,321 人で、前年(前年 21,897 人)に比べ 576 人(2.6%)減少し、8 年連続で減少したことが報じられた。一方、青少年に焦点をあてると、同統計の年齢別自殺者数「19 歳以下」は 567 人で、前年(520 人)に比べ 47 人(9.0%)増加した。これは、他の年代における自殺者数が減少(20 歳代:−1.0 %、30 歳代:−4.3%、40 歳代:−1.9%、50 歳代:−1.0%、60 歳代:−7.9%、70 歳代:−1.9%、80 歳代以上:−0.3%)していることに逆行していた。また、職業別自殺者数「学生・生徒等」は、817 人(男性 577 人、女性 240 人)で、前年(791 人)に比べ 26 人(3.3%)増加した。

平成 28 年の人口動態統計による 15 歳～39 歳までの死因の 1 位も自殺である[2)]ことから、青少年を取り巻く自殺問題や自殺予防対策は喫緊の課題である。

２）自殺予防教育に関する研究動機と研究活動

研究者らが自殺予防教育(以下、予防教育)に取り組むきっかけは、平成 19 年度山梨県が 12−23 歳 2000 人を対象に実施した「青少年の生活意識調査報告書」[3)]結果に衝撃を受けたことであった。結果は、約 8 割が将来や勉強について悩みを抱え、「死にたいと思ったことがある」32.3%で、この内「相談した」人は 4 分 1 で、相談相手は「親友」が半数と最も多かった。この結果より、自殺を考える程の悩みを抱える若者が大勢いるにもかかわらず、相談できないでいる若者像が浮かび上がった。

しかし、「相談した」人は 4 分 1 と少なかったが、相談相手は「親友」であったことから、その「親友」が自殺予防のゲートキーパーとしての役割を担うことができれば、「死にたい」と思

1）山梨県立大学看護学部 精神看護学領域

うほどの悩みを抱えた生徒や学生の自殺防止に繋げられるのではと、衝撃を希望へと転じさせることができた。すなわち、生徒や学生が深く悩んだ時に、周りにいる同級生や友人に気軽に相談ができる力や校風を育てること、同時に同級生や友人が『いつもと違う』と気づいた時には声をかけたり、友人から悩みを打ち明けられた時には話を聴いたり、自分の力を超える相談には、周りの教員や大人につなぐ力を育てることが、自殺予防の課題解決につながるのではないかと考えた。

まず、研究者らは自殺予防教育研究会を立ち上げ、平成 21 年度～平成 24 年度は本学地域研究交流センター事業の助成を受け、研究テーマ「青少年を対象とした自殺予防教育の推進に関する研究」に取り組んだ[4)~7)]。ここでは、学部の学生や高大連携等の県内の高校生を対象に、予防教育を実践しながら対象者に①深く悩んだ時には身近な友人に相談する力を、②友人から悩みを打ち明けられた時には話を聴く力を、相談はなくても③身近な友人が『いつもと違う』と気づいた時には声をかける力を、④自分の力を超える相談には身近にいる信頼できる大人につなぐ力を育てることを、『予防教育 4 つのねらい』とした自殺予防教育プログラムを開発[6)7)]し、予防教育実施後の「予防教育が普段の生活に役に立つ」程度とその理由の回答データの質的分析を通して、内容分析の指標(以下、分析指標)を抽出した[8)~11)]。しかし、これらの予防教育は、高校の特別講義として 1 回 50 分又は 100 分、大学の授業として 1 コマ 90 分での横断的な成果にとどまった。

次は、平成 25 年度～平成 27 年度の科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究)において、研究テーマ「山梨県内の高校生に実施した自殺予防教育とその成果」として、縦断的研究に取り組んだ[12)~16)]。協力が得られた県内 4 高校をモデルに、平成 25 年度入学の生徒 755 名を対象に、それまでの予防教育プログラムを、3 年間にわたる内容に再構成して継続実施し、予防教育の成果を縦断的にも検討した。モデル 4 高校の生徒に年度毎、計 3 回(1 回 45 分～50 分)実施した予防教育のうち第一回を除く、第二回・第三回予防教育の前後に測定した「予防教育が普段の生活に役に立つ」程度の調査は、各前後の肯定的回答率は全ての高校において上昇したが、4 高校とも肯定的回答率が第一回に比べ漸次上昇したといえなかった。しかし、第三回予防教育後のみ実施した『予防教育 4 つのねらい』の達成状況調査は、前述②と③は全ての高校は 8 割以上が、同①と④は全ての高校は 7 割以上が肯定的回答であった。

これら予防教育を 3 回実施した前後の生徒の「予防教育が普段の生活に役に立つ」程度の肯定的回答率の縦断的成果、第三回予防教育後の『予防教育 4 つのねらい』の達成状況の成果より、総合的には予防教育を複数回実施することの成果は大きいと考えられた。

３）青少年の自殺予防教育に関する先行研究の概括

2007 年 4 月～2017 年 3 月の医学中央雑誌を中心とした文献からは、「自殺予防」「教育」「学校」をキーワードとしてヒットしたものは 64 件で、内訳は解説・特集等 32 件、会議録 18 件、原著論文 13 件であった。以下、本文中の【　】は当該文献が掲載された雑誌の特集タイトルを、「　」は当該文献のタイトルを記述した。

うち児童・生徒・学生を対象とした予防教育プログラム開発及び予防教育の実践に関するものは 15 件であった。解説・特集等は、阪中(2011)の「子どもの自殺予防 生徒向け自殺予防プログラムを中心に」[17)]、朝日ら(2015)の【自殺予防と精神科臨床−臨床に活かす自殺対策−Ⅱ】「ネットいじめと自殺予防教育」[18)]、阪中(2015)の【自殺対策の現状】「学校における自殺予防教育の実践からみえてきたもの」[19)]、阪中(2015)の【子どもの自殺をめぐって】「学校における自殺予防教育」[20)]、佐藤(2014)の「学校における子どもの自殺予防プログラム」[21)]、阪中(2016)の【子どもの自殺を予防せよ!】「自殺予防教育『子ども向け自殺予防プログラム』について」[22)]、阪中(2016)の【学校と精神医学】「学校における自殺予防教育」[23)]、

川野(2017)の「自殺予防教育プログラム GRIP の開発」[24]、小西ら(2017)の「『自殺予防教育』(いのちの学習)に取り組んで」[25]の 9 件であった。会議録は、川野(2013)の「中学校における自殺予防教育プログラム GRIP」[26]、川野(2014)の「中学校での自殺予防プログラム GRIP の構成」[27]、川野(2014)の「学校における自殺予防プログラム 背景と概念の構成」[28]、川野(2014)の「学校における自殺予防プログラム プログラム実施による中学校生徒への効果」[29]、清水(2015)の「A 県 D 高校生に実施した自殺予防教育の成果」[13]、川野(2016)の「子ども・若者の自殺予防 学校における自殺予防教育」[30]の 6 件であった。原著論文は、白神ら(2015)の「中学校における自殺予防教育プログラムの達成目標についての実証的検討」[31]1 件のみであった。

このように児童・生徒・学生を対象とした予防教育に関しては、プログラム開発しながら実証的な取り組みを行っているのが現状であった。青少年の自殺を予防するには、今後もこれら予防教育の成果について実証研究を積み重ねながら、さらに効果的な予防教育プログラムの開発が求められるといえる。同時に、その成果については量的データ解析に偏ることなく、生徒や学生から発せられた言葉、すなわち質的データにも注目する必要を研究者らは強く感じている。

そこで、本稿では、平成 25 年度～平成 27 年度の科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究,課題番号:25590246)で取り組んだ、研究テーマ「山梨県内の高校生に実施した自殺予防教育とその成果」の中から、予防教育を受講した生徒がその教育は『普段の生活に役に立つ』と肯定的に回答し、その理由の記述が分析指標＜過去の経験の振り返り＞(以下、＜振り返り＞)に該当したデータを質的に分析し、生徒の経験の中にある自殺予防につながる知見を明らかにすることとした。

Ⅱ．研究目的と意義

本研究の目的は、山梨県内の 4 高校で年度毎 3 年間にわたり、計 3 回実施した予防教育を受講した生徒が、予防教育を『普段の生活に役に立つ』と肯定的に回答し、その理由の記述が分析指標＜振り返り＞に該当したデータより生徒の経験の中にある自殺予防につながる知見を明らかにすることである。

分析指標＜振り返り＞に該当した生徒の経験の中の自殺予防につながる知見を明らかにすることは、生徒が予防教育という刺激を受け想起させられた普段の生活体験を、生徒の視点から浮かび上がらせることであり、自殺予防につながる実際的な手がかりが得られることが予測され、その意義は大きい。

Ⅲ．用語の定義

１）自殺予防教育

本研究における予防教育とは、前述の『予防教育 4 つのねらい』を達成するために 3 年間にわたり年度毎、計 3 回実施した教育プログラムのことである。

モデル 4 校が予防教育を受け入れた科目は、「保健体育」(ただし、三年目教育は「体育」)が 1 校、「ロングホームルーム」が 2 校、「総合的な学習の時間」が 1 校であった。実施の場所として、一年目教育、二年目教育、三年目教育の全てをクラス毎それぞれの教室で実施したのが 1 校、一年目教育と二年目教育は視聴覚教室で、三年目教育は体育館で一斉に実施したのが 3 校であった。1 回の教育所要時間は 45 分～50 分であった。

次に、それぞれの教育のポイントを示した。

［一年目教育のポイント］

生徒が、『予防教育 4 つのねらい』を知ること、自殺についての自分の認識を知り修正すること、H24 の日本及び山梨県の自殺の現状を知ること、自殺者に共通の心理を知ること、自殺のサインは同時に自殺予防の 10 か条として活用できることを知ること、その自殺予防の対処法は普段の生活の中でとる自分や友達が困った時の対処行動の中にもあり、「T(Tell)」・「A(Ask)」・「L(Listen)」・「K(Keep safe)」のそれぞれを頭文字とする 4 つの対処法「TALK の原則」[32]を知る

ことであった。

このように一年目教育は講義が中心であったが、その中でも大事にしたことは普段の生活の中でとる自分や友達が困った時の自己の対処行動の特徴を、発問を用いて振り返ってもらうことであった。

［二年目教育のポイント］

生徒が、『予防教育 4 つのねらい』を確認すること、自殺についての自分の認識を再修正すること、H25 の日本及び山梨県の自殺の現状を知ること、一年目教育で学んだ「TALK の原則」の「T」・「L」について状況設定し、友人が『いつもと違う』時の声のかけ方や話の聴き方を生徒相互にロールプレイを通して体験学習すること、「TALK の原則」の「A」・「L」・「K」についても状況設定し、研究者らが講師となってデモンストレーションし、見学を通して擬似体験学習することであった。

このように二年目教育は体験学習が中心であったが、大事にしたことは実際に相手に声をかけたり話を聴いたりする体験と、同時に相手に声をかけてもらったり話を聴いてもらったりする体験を通して、実感を伴う学びしてもらうことであった。

［三年目教育のポイント］

生徒が、『予防教育 4 つのねらい』を確認すること、自殺についての自分の認識を再修正すること、H26 の日本及び山梨県の自殺の現状を知ること、母親を自死で亡くした息子の後悔と自責感、そして自死遺族の支援に携わる人々への期待が込められた「自死遺族の体験談」[33]を著者の了解の下で教材として用い、研究者ら講師による朗読を通して生徒らには感じた自分の率直な感想や考えをメモし、小グループでは意見交換し、自殺予防を身近な課題として考えることであった。

このように三年目教育は、「自死遺族の体験談」という手記を教材としたが、大事にしたことは生徒ひとり一人が感じたものを言葉にし、グループ全体で共有し、仲間の中には多様な考えがあることを知り、認め合うことであった。

２）＜過去の経験の振り返り＞

本研究における＜振り返り＞とは、予防教育での学びは役に立つととらえ、その肯定的な回答理由として、過去に自殺や自殺予防に関わる出来事に遭遇した経験を想起して記述した内容、予防教育で学んだことと関連づけて、普段の生活の見直しや自身の周りに起きている変化を記述した内容等とした。

具体例として、「今までリスカをしていた人を見たことがあるし、自分も昔経験があったので、予防の方法や今できることが分かったから。」や「自分も部活でうまくいかないと気分が沈んでしまい、とことん落ち込んでしまう時があるので、今回の話（予防教育）を聞き、活かそうと思った。」が挙げられた。

なお、これら具体例は後述する結果にも記載した。

Ⅳ．研究方法

１）対象者

山梨県内 4 高校の平成 25 年度入学生 755 名

２）データ収集方法

（１）一年目教育、二年目教育及び三年目教育受講後の調査

無記名式の調査票を用いて、受講直後に「予防教育は普段の生活に役に立ちそうか」の設問に対して、「大変そう思う」「そう思う」「あまり思わない」「全く思わない」の 4 件法で回答し、そう回答した理由については自由記述とし、ボックスで任意回収した。

その中で、「大変そう思う」「そう思う」と肯定的に回答したデータの回答理由が、分析指標＜振り返り＞に該当したデータを抽出した。

（２）二年目教育、三年目教育受講前の調査

同じく無記名式の調査票を用いて、次の予防教育受講約 1 か月前に「予防教育は普段の生活に役に立っているか」の設問に対して、同じく 4 件法で回答し、その肯定的な回答理由が、分析指標＜振り返り＞に該当したデータを抽出した。

３）データ収集期間

平成 26 年 1 月～平成 29 年 1 月

４）分析方法

予防教育として学んだ教育内容がその後の生活に反映される期間を考慮し、抽出したデータを、一年目教育後・二年目教育前、二年目教育後・三年目教育前、三年目教育後の 3 期に区分し、意味内容の類似性で整理し、コード化、次いでカテゴリー化を図った。これらの分析過程は、研究者間で協議しながら実施し、信憑性の確保に努めた。

５）倫理的配慮

生徒のそれぞれの予防教育への参加は任意とし、たとえ欠席しても科目の単位修得に影響しないよう配慮していただいた。また、予防教育実施の導入時には心理的支援としてこころの揺らぎを体験するが普通の反応であることを説明し、予防教育終了直後には心理的支援として緊張をほぐすためにリラゼーション体操を 1 分程度実施した。

なお、本研究は平成 25 年度、平成 26 年度、平成 27 年度の山梨県立大学看護学部及び大学院看護学研究科の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。本学の承認番号制導入は平成 26 年度からであり、平成 25 年度は受付番号「10-3」のみであった。平成 26 年度の承認番号は「1410」、平成 27 年度の承認番号は「1506」であった。

Ⅴ．結果

以下、本文中のカテゴリーは【　】で、具体例は「(斜体)」で表記した。

１）全調査の予防教育の役立ちに関する肯定的回答数及び肯定的回答率の平均

全 5 回の調査「予防教育は普段の生活に役に立ちそうか」あるいは「予防教育は普段の生活に役に立たったか」に関する有効回答数 4,064、肯定的回答数 3,137、肯定的回答率の平均 77.2%であった。

２）全調査の予防教育の役立ちに関する肯定的回答理由が＜振り返り＞に該当したデータ数

全 5 回の調査「予防教育は普段の生活に役に立ちそうか」あるいは「予防教育は普段の生活に役に立たったか」に関する肯定的回答理由が、＜振り返り＞に該当したデータ数は 200(6.4%)であった

３）一年目教育後・二年目教育前の＜振り返り＞

一年目教育後・二年目教育前の＜振り返り＞データ数 77、コード数 16、カテゴリー数 11 であった(表 1 参照)。以下、カテゴリー毎に具体例を紹介した。

【過去の自殺願望や自傷行為の想起から学ぶ自己理解や自己対処法】の具体例は、「*今、自分を振り返ると『死にたい』と思う時は友達や家族と過ごすことが大切だと思った。*」(A 校女子)、「*自分も人生が辛く『僕が死んだらどうなるのか』等を考えるときがあった。そんな時は『どうすれば(気持ちが)楽になるか』を考えたいと思う。*」(D 校男子)、「*今までリスカをしていた人を見たことがあるし、自分も昔経験があったので、予防の方法や今できることがわかった。*」(C 校女子)であった。

【深く悩んだ経験をためずに相談する意識へと変化】の具体例は、「*自殺とまでいかなくとも深刻な悩みの場合、こういった話を聞いたりすればよくなるかなと思った。また、皆がどんな風に気分転換しているかわかって参考になった。*」(B 校女子)、「*自分も部活でうまくいかないと気が沈んでしまいとことん落ち込んでしまう時があるので今回の話（予防教育）を聞き活かそうと思った。*」(C 校男子)、「*少しの悩みでも友達に打ち明けられなかった。でも講話を聞いてあまりにも深刻なことなんだと思った。これからまだ 2 年以上学生生活をして悩みがあると思うので、相談し合いながら頑張ろうと思った。*」(C 校女子)であった。

【自殺サインを学んで気づく自己の傾向】の具体例は、「*自分がうつになっているかどうかに気づきやすくなったと思う。*」(A 校女子)、「*自殺サインの中のうつ病の症状に自分が当てはまっていたので、結構身近に感じ、自殺というものに対して深く考えさせられた。*」(C 校女子)であった。

表１　過去の経験の振り返り　（一年目教育後・二年目教育前）

カテゴリー	コード
①過去の自殺願望や自傷行為から学ぶ自己理解や対処法	自身の自殺願望の過去を想起しながら学びが自分や同世代に役立つと思った
	自身の自傷行為や病んだ経験から、今回学んだ対処方法は役立つと思った
②深く悩んだ経験をためずに相談する意識へと変化	自身の深く悩んだり落ち込んだりした経験から、今回学んだ対処方法は役立つと思った
	以前は悩みや思いを言えなかったが内にため込まず相談しようと意識が変わった
③自殺サインを学んで気づく自己の傾向	自殺のサインなどの学びから自分を見つめなおし、自己の傾向に気づいた
④あらためて考えさせられた自殺問題や命の大切さ	自殺問題について考えることで分かることがあり命の大切さを学んだ
	家族と共有し命の大切さをあらためて学んだ
	過去の予防教育を想起し今回学びを深めた
⑤身近な人の自死体験から見えてきたその人への理解や関わり	身近な人の自死体験を想起し、当時は分からなかったその人の心の内や理由の理解に繋がった
	身近な人の自死体験を想起し自身の関わりと関連づけた
⑥深く落ち込む友人を前に戸惑った経験があるから分かった声のかけ方	深く落ち込む友人を前に戸惑った経験を想起し、その時は分からなかった声のかけ方が分かった
⑦身近な人の自殺願望や不登校への対処の内省から高まる自殺予防への関心意欲	身近な人の自殺願望や不登校に対し自分がとった行動を想起し内省し自殺予防に関心意欲が向いた
⑧周囲の様子への関心の高まりと気配り	以前より友人の様子に関心が向き、接し方の気配りができるようになった
⑨自身や周囲の人の暴力的言動や軽率な言動の減少	以前より暴力的なまた軽々しい言動が少なくなった
⑩周囲の人の変化への気づき・声かけ・相談	孤立している人や『いつもと違う』友人に気づけたり、声をかけたり、相談に乗れるようになった
⑪予防教育を意識した生活	予防教育を意識した生活行動をとっている

【あらためて考えさせられた自殺問題や命の大切さ】の具体例は、「*家族と自殺予防教育について話して命の大切さを学んだから。*」(B 校男子)、「*中学校の時にもこのような説明を受けたがあらためて自殺について考えさせられた。*」(D 校男子)であった。

【身近な人の自死体験に学ぶその人の理解や関り】の具体例は、「*１つのいじめで自殺へと追い込んでしまうこと。私の身近にも自殺しようとしていた人がいたから。*」(A 校女子)、「*身の回りで自殺して亡くなってしまった人がいるだけにその人の心中がわかった。*」(D 校男子)であっ

た。

【深く落ち込む友人を前に戸惑った経験があるから分かった声のかけ方】の具体例は、「*友達が落ち込んでいるときにどう話しかければいいのかわからなかったが、何となくわかった気がする。*」(D 校女子)であった。

【身近な人の自殺願望や不登校への対処の内省から高まる自殺予防への関心意欲】の具体例は、「*自殺とまではいかなくても不登校になってしまた友人がいたので今回の授業でちゃんと話を聞いてあげればよかったなとか何で変化に気づかなかったんだろうとか考えたので同じようなことが起きないようにしたいなと思ったから。*」(C 校女子) 、「*友達にそういう事を言われた時『あっまたか』と流してしまっていたが、今後は 1 回 1 回親身に話しを聞くことができたら良いなと思った。*」(D 校女子)であった。

【周囲の様子への関心の高まりと気配り】の具体例は、「*周りの人への気遣いが少しできるようになったと思うから。*」(D 校男子)、「*自殺について学んだことで関心が以前より高まったとともに友達を気遣うことが増えたと思う。*」(D 校女子)、「*友達との会話などで相手の気持ちを考えるなどといったところに繋がっている。*」(C 校男子)であった。

【自身や周囲の暴力的言動や軽率な言動の減少】の具体例は、「*普段の生活で言葉の暴力が自分も周りも減ったから。*」(C 校男子)であった。

【周囲の人の変化への気づき・声かけ・相談】の具体例は、「*友人の相談などに親身になって聞くことが多くなった。*」(A 校女子)、「*大人のぐちを聞いてあげるようになった。*」(D 校男子)、「*周りに一人になっている人がいる。少し話してくれたので、その人の役に立ちそうだと思った。*」(D 校女子)であった。

【予防教育を意識した生活】の具体例は、「*授業で聞いたことを意識して生活しているから。*」(D 校男子)であった。

4）二年目教育後・三年目教育前の＜振り返り＞

二年目教育後・三年目教育前の＜振り返り＞データ数 65、コード数 16、カテゴリー数 10 であった(表 2 参照)。以下、カテゴリー毎に具体例を紹介した。

【過去の自殺願望や悩んだ経験から将来役立つと認識した予防教育】の具体例は、「*辛い時の心の持ち方が変わったから。*」(D 校男子)、「*自分も以前『死にたい』と言われたとき、どう言葉をかけていいのかとても悩んだ、また自分自身も思ったことがあるため今日はとても参考になった。*」(C 校女子)であった。

【身近な人の自殺願望や自死という衝撃的体験からの学び】の具体例は、「*最近、身近な人の自死に遭遇し衝撃を受けた。*」(A 校女子)、「*元カノに自殺願望のようなことを言われた、めまぐるしい記憶がよみがえった。*」(C 校男子)であった。

【身近に自殺願望を持つ人を認知して高まる自殺予防への意識】の具体例は、「*私は自殺について考えたことはないが、友だちが自殺したいと言った時にひたすら止めたことがある。なので止めれば友だちも止めてくれると思う。*」(A 校女子)、「*友達でいろんなことに悩み鬱病みたいになってついに部活を辞めた人がいるから身近にもこのように精神的に疲れた人もいるんだと感じた。*」(D 校男子)であった。

【自殺する人の気持ちや背景への理解の深まり】の具体例は、「*自殺をする人の気持ちを知ったから、自分はそういう時どうなるのかと考えるようになった。*」(B 校男子)であった。

【体験学習を活かして自殺予防につなげた経験】の具体例は、「*身の回りに自殺したいと思っていた人がいたけどこの学習で学んだことを話したら踏みとどまってくれた。*」(B 校男子)であった。

【戸惑った経験があるから分かった具体的な対処法】の具体例は、「*今まで友人の相談を受ける中で、かなり深刻に悩んでいる子もいたりしてそんな時どんな風に声をかけたらいいのかわからなかったが、実際に先生方がやっている例をみてとても参考になった。*」(D 校女子)であった。

表 2　過去の経験の振り返り　（二年目教育後・三年目教育前）

カテゴリー	コード
①過去の自殺願望や悩んだ経験から将来役立つと認識した予防教育	自殺したくなるほど悩んだとき役立つと思った
	日頃からよく悩む自分にとって学んだことは考え方や気持ちの持ち方を変えてくれた
	孤独感や自殺願望があったことを想起し、今回の学びが自殺予防に役立つと思った
②身近な人の自殺願望や自死という衝撃的な体験からの学び	過去の身近な人の自殺願望や自死による衝撃体験を想起し、今回の学びが役立つと思った
③身近に自殺願望を持つ人を認知することで高まる自殺予防への意識	自傷行為や自殺願望の友人に自分や周囲がとった行動を想起し、自殺予防と関連づけて考えた
	身近に悩んたり自殺願望を持つ人がいることから学んだことを役立てようと思った
④自殺する人の気持ちや背景への理解の深まり	今までは分からなかった苦しむ人や自殺する人の気持ちの理解に近づいた
	いじめと自殺予防を関連づけて考えた
⑤体験学習を活かして自殺予防につなげた経験	学んだことを用いて相談に乗ったら、実際に自殺予防ができた
⑥戸惑った経験があるから分かった具体的な対処法	深刻な悩みの相談に戸惑った経験を想起しながらデモを通じて具体的に学んだ
⑦体験学習は身近な問題・生活に役立つと認識	体験学習の内容を身近な問題と感じた
	学んだことが生活の中で役にたった
⑧周囲の人への気配り意識の高まり	以前より周りの人に気を配るようになった
⑨自身や周囲の人の暴力的言動や軽率な言動の減少	自分も周りも「死ね」等の他者を傷つける言葉、また「死にたい」等の言葉を軽々しく使わなくなった
⑩学びにより高まった声かけや相談行動	以前より友人の相談に乗れるようになった
	落ち込んだり、いつもと違う友人に声をかけられるようになった

【体験学習は身近な問題・生活に役立つと認識】の具体例は、「*(学んだことは)学校生活でとても役に立っている。*」(B 校男子)、「*最近よく眠れないので、何か問題があるのか考えようと思った。*」(C 校男子)であった。

【周囲の人への気配り意識の高まり】の具体例は、「*友だちの様子の変化を前よりも気にするようになった。*」(A 校女子)、「*自殺は止めることのできるもので普段から友達や家族のことを気にかけて変化に気づくことができると思うから。*」(B 校女子)、「*友人の言動に気を遣うようになった。*」(D 校男子)であった。

【自身や周囲の人の暴力的言動や軽率な言動の減少】の具体例は、「*簡単に死にたい類の言葉を使わなくなった。*」(A 校女子)、「*『死ね』や『うざい』など、他人を傷つける言葉を言わないよ*

う気を配るようになった。」(D 校男子)であった。

【学びにより高まった声かけや相談行動】の具体例は、「*友人に相談された時にどう対応していいか考えた。その際、大変役立ったと思うから。*」(A 校女子)、「*深く悩んだ人に対応するときの行動ができるようになったから、少しでも参考になった。*」(C 校男子)、「*前回学習したＴＡＬＫの原則の話は役に立った、相談を受けることがあるので、今回の学習も役に立つと思う。*」(D 校男子)、「*少しでも元気がない友達に声をかけたりするなどの行動に移すことができるようになったから。*」(D 校女子)であった。

５）三年目教育後の＜振り返り＞

三年目教育後の＜振り返り＞データ数 58、コード数 20、カテゴリー数 8 であった(表 3 参照)。以下、カテゴリー毎に具体例を紹介した。【身近にいるうつ傾向や自殺サインを出している人に役立てられると認識した予防教育】の具体例は、「*自分の周りにも鬱病に近い人がいるから、しっかり話をしていきたいと思った。*」(B 校女子)、「*家族にそういったサインを出している人がいる。*」(D 校女子)、「*過去に自殺をしたい(と言う)子がいた。‥(その子は)前の学校でいじめにあっていた。(学んだことは)苦しんでいる友だちを助ける１つの役立ちになる。*」(A 校女子)であった。

【自殺願望者だけでなく悩んだり苦しんでいる人へのケアと相談行動】の具体例は、「*普段の生活で自殺という言葉を意識することは今までなかったが、これからもしそのような(自殺願望の人との)場面に出くわしたらどのように対処すべきかが分かったことは大きいと思う。*」(D 校男子)、「*よく相談されたりするので、自殺に限らず心のケアという形で実践していきたい。*」(B 校男子)、「*身内に悩んでいる人がいたら話を聞いてあげようと思ったから。*」(D 校女子)であった。

【教材である自死遺族の体験談をきっかけに反省する身近な人との関係性】の具体例は、「*たまにイライラしている時、母にあたってしまう。体験談のようになってしまったら遅いので気をつけたい。*」(B 校女子)、「*自分も‥家族が悩んでいる時、冷たくあたってしまうときがあるから後悔する前にちゃんと話を聞いてあげようと反省することができた。*」(C 校女子)であった。

【教材をきっかけに認識した身近な人を支えることやコミュニケーションをとることの大切さ】の具体例は、「*改めて友達を含め自分と接点のある人たちを大切にしたいと思えたため、自殺について実話を学ぶことで人の命の重さを感じられたため。*」(D 校男子)、「*母の気が沈んでいる時など支えてあげたいと思うから。*」(C 校女子)、「*自死遺族の話を聞いて家族の苦しみでさえもわかってあげられないことがあったので、もっと身近な人とのコミュニケーションをとろうと思ったから。*」(A 校女子)、「*家族との会話にもう少し気を配ろうと思った。*」(D 校男子)であった。

【教材をきっかけに自死遺族への理解的態度から見つめ直す家族との向き合い方】の具体例は、「*自死した人の家族の気持ちになって考えることができた。*」(D 校男子)、「*今回読んだ体験談のK氏も私と同じように心のどこかで『自死なんて自分とは無縁だ』と思っていただろうという点で共通点を感じ、気をつけねばいけないと思った。*」(D 校女子)であった。

【自殺のサインを意識した周りの人への注意や気配り】の具体例は、「*困っている人を見たら気にするようになったから。*」(C 校女子)、「*自分は人の細かいしぐさにあまり気づかないので１０カ条を意識するようにしたい。*」(D 校男子)であった。

【予防教育の内容を周囲に発信】の具体例は、「*周りの人に(学んだことを)教えられるから*」(D 校男子)であった。

【人間関係や困ったときの対処等に活かしたい予防教育】の具体例は、「*周りの人との人間関係に役立つものがあったから。*」(D 校男子)「*自分が困った時ため込まず吐き出すことの重要性を学んだから。*」(D 校女子)「*自殺についてグループの人とよく話し合っていろんな意見を聞くことができた、自分にはない考えを聞いてなるほどと思った。*」(D 校女子)であった。

表３　過去の経験の振り返り　（三年目教育後）

カテゴリー	コード
①身近にいるうつ傾向や自殺サインを出している人に役立てられると認識した予防教育	うつ傾向の人や悩んでる人が身近にいる
	身近な人のサインに気づいて役立つと思った
	過去の経験を想起し、今後役に立つと思った
	今身近にいる自殺願望や悩みを持つ友人の立場に立って援助したいと思った
②自殺願望者だけでなく悩んだり苦しんでいる人へのケアと相談行動	自殺願望のある人に出会った時の対処法が分かった
	自殺願望者に限らず身近な人の相談やこころのケアを実践したいと思った
③教材である自死遺族の体験談をきっかけに反省する身近な人との関係性	教材である自死遺族の体験談をきっかけに普段の親に対する思いやりのない自身の態度を反省させられた
④教材をきっかけに認識した身近な人を支えることやコミュニケーションをとることの大切さ	命の重さを感じた
	身近な人への気遣いや支えることに気づかさせられた
	家族とのコミュニケーションが大切だということを思い知らされた
	普段の自身の言葉を見直すきっかけになった
⑤教材をきっかけに自死遺族への理解的態度から見つめなおす家族との向き合い方	体験談のＫ氏の立場に立って考えることができた
	体験談を通して自身の家族への対応で気をつけたいことを明確にしている
⑥自殺サインを意識した周りの人への注意や気配り	周りの人への気配りをするようになった
	自殺のサインを意識して周りの人に注意を向けている
⑦予防教育の内容を周囲に発信	学んだことを周囲に伝えたいと思った
⑧人間関係や困ったときの対処等に活かしたい予防教育	人との関係づくりに役に立つと思った
	心の揺れ動き・心の弱さがあるからこそ気をつけたいと思った
	将来予測される精神的負担に対し相談する等学んだことを活用したいと思った
	グループディスカッションを通して自分の考えを広げることができた

Ⅵ．考察

１）一年目教育後・二年目教育前の＜振り返り＞内容について

モデル 4 校の一年目教育直後調査～二年目教育前調査の期間は、長短はあるが 6 か月～11 か月であった。生徒の多くは予防教育を受講する

のは初めての経験であり、＜振り返り＞のデータ数が 77 と 3 期間の中で一番多かったことから、「自殺」や「自殺予防」について自身の普段の生活を意識して振り返り、関連づけて回答したからではないかと考えられた。

11 個のカテゴリーのうち【過去の自殺願望や自傷行為から学ぶ自己理解や対処法】【深く悩んだ経験をためずに相談する意識へと変化】は、回答した生徒自身が過去に深く悩んだり自殺願望を抱いたりした経験を想起し、自己開示しながらも、予防教育で学んだ対処法の中にヒントを見つけ、「*予防の方法や今できることがわかった*」「*これからまだ2年以上学生生活をして悩みがあると思うので、相談し合いながら頑張ろうと思った*」と、とらえられたと考えられた。

【自殺サインを学んで気づく自己の傾向】では、生徒は「*自殺のサインの中のうつ病の症状が自分にあてはまっていたので*」と自殺予防を身近な大事なこととらえられ、【あらためて考えさせられた自殺問題や命の大切さ】では、「*家族と自殺予防教育について話して命の大切さを学んだ*」と、自殺問題は身近で取り組む大事な課題としてとらえられ、生徒の意識に変化をもたらしていると考えられた。

【身近な人の自死体験に学ぶその人の理解や関り】では、身近な人の自死体験を予防教育で学んだ自殺者に共通の心理と関連づけ「*その人の心中がわかった*」と理解につなげたり、【深く落ち込む友人を前に戸惑った経験があるから分かった声のかけ方】【身近な人の自殺願望や不登校への対処の内省から高まる自殺予防への関心意欲】では、身近な人が深く悩んでいた様子を想起し、「*どう話しかければいいか分からなかったが、何となくわかった気がする*」「*ちゃんと話を聞いてあげればよかった‥何で変化に気づかなかったんだろう‥同じようなことが起きないようにしたい*」「*『あっまたか』と流してしまったが、今後は‥親身に話を聞くことができたら‥*」と、その身近な人との関係の中で戸惑ったり気づかなかったり聞き流したことを振り返り、予防教育の中に今後の関わり方のヒントをつかんでいると考えられた。

【周囲の様子への関心の高まりと気配り】【周囲の人の変化への気づき・声かけ・相談】の「*友人の相談などに親身になって聞くことが多くなった‥*」「*大人のぐちを聞いてあげるようになった*」「*1 人になっている人が‥少し話をしてくれた‥その人の役に立ちそうだ‥*」からは、自分の周囲の人に関心や注意向けていること、そして変化に気づいたら声をかけようや相談にのろうと意欲を表出し、実際に取り組んでいることが分かった。

【自身や周囲の暴力的言動や軽率な言動の減少】では、「*普段の生活で言葉の暴力が自分も周りも減った*」という記述からは、予防教育を全員で受講したからこそクラス全体が人に優しい雰囲気に変化したことを実感している様子が短い文章から伺えた。そして、【予防教育を意識した生活】に変化していると考えられた。

２）二年目教育後・三年目教育前の＜振り返り＞内容について

モデル 4 校の二年目教育直後調査～三年目教育前調査の期間は、長短はあるが 5 か月～14 か月であった。生徒の中には一年目教育の記憶が定着している者もいるが忘却している者も多くいると考えられる。＜振り返り＞のデータ数は 65 と 3 期間の中で二番目であった。特に、二年目教育は生徒相互の体験学習を実施したことから直後の調査では予防教育は役に立ちそうと意識は高かったのではないかと考えるが、三年目教育の事前調査では「自殺」や「自殺予防」について、普段の生活とどの程度、関連づけ回答できたか興味あるところである。

10 個のカテゴリーのうち【過去の自殺願望や悩んだ経験から将来役立つと認識した予防教育】は、生徒自身が深く悩んだり自殺願望を抱いた経験を想起し、自己開示しながらも、予防教育を受講して「*辛い時の心の持ち方が変わった*」や「*『死にたい』と言われたとき、どう言葉をかけていいのか悩んだ、‥自分自身も思ったことがあるため‥とても参考になった*」は、体験学習や研究者らでのデモンストレーションが参考

になったのではないかと考えられた。

【身近な人の自殺願望や自死という衝撃的な体験からの学び】では、予防教育を受講することで身近な人の自死や自殺願望に衝撃を受けた体験の想起を余儀なくされ、「*自死に遭遇し衝撃を受けた*」「*めまぐるしい記憶がよみがえった*」と苦悩を表出した記述が見られたが、予防教育を肯定的にとらえられたことを加味すると、想起しながらも過去の体験として俯瞰することができたとも考えられた。【身近に自殺願望を持つ人を認知して高まる自殺予防への意識】では、実際「*友人が自殺したいと言った時にひたすら止めたことがある*」と自殺防止の体験の記述が見られたが、「*自殺したい*」という友人に関心を向け、その気持ちが収まるまで関わったという親友だからできた自殺防止だったのではないかと考えられた。回答してくれたこの生徒の自殺防止の行為には学ぶものがあるが、生徒の不安や負担感を考えると、「死にたい」と訴える生徒とそれに関わろうとする生徒両者の安全を確保する必要があり、関わろうとする生徒の能力を超えた場合は、信頼できる大人につなげてほしいと願わずにはいられない。また【体験学習を活かして自殺予防につなげた経験】では、「*身の回りに自殺したいと思っていた人がいたけどこの学習で学んだことを話したら踏みとどまってくれた*」との記述があった。予防教育で学んだどのようなことを話したのか詳細を知りたいところであるが、調査は無記式であり研究の限界といえる。

【自殺する人の気持ちや背景への理解の深まり】【戸惑った経験があるから分かった具体的な対処法】【体験学習を身近な問題・生活に役立つと認識】【周囲の人への気配り意識の高まり】【学びにより高まった声かけや相談行動】では、一年目教育後・二年目教育前の＜振り返り＞とも共通した生徒の戸惑いや周囲への気配り、声かけや相談活動へとつなげられた経験、例えば「‥*深刻に悩んでいる子もいたり‥どんな風に声かけたらいいか分からなかったが、実際に先生方のやっている例を見てとても参考になった*」「*友達の変化を前より気にするようになった*」「*深く悩んだ人に対応するときの行動ができるようになった*」「*すこしでも元気がない友達に声をかけたり‥行動に移すことかができるようになった*」の記述からは自殺予防につながる具体的な対処行動が伺えた。

【自身や周囲の人の暴力的言動や軽率な言動の減少】も一年目教育後・二年目教育前の＜振り返り＞と共通したカテゴリーであるが、生徒自身が「*簡単に死にたい‥を使わなくなった*」、*他人に対して『『死ね』や『うざい』など、‥傷つける言葉を言わないよう気を配る‥*」の記述からは、今後ともクラスの雰囲気が継続して優しくなることを願わずにはいられない。

３）三年目教育後の＜振り返り＞内容について

モデル 4 校の三年目教育直後調査は、＜振り返り＞のデータ数が 58 で 3 期間の中で一番少なかったが、調査は 1 回のみであったことが影響したといえる。モデル校での実施時期は 3 年生の 4 月、5 月、7 月、12 月であった。ここでは、生徒が「自死遺族の体験談」の著者から学んだこと、小グループ活動を通して仲間の意見から気づいたこと、そして自殺予防は身近なこと重要なこととして学べたか、予防教育の最終段階として、教育プログラム全体の成果が問われたのではないだろうか。

8 個のカテゴリーのうち【身近にいるうつ傾向や自殺のサインを出している人に役立てられると認識した予防教育】では、「*自分の周りにも鬱病に近い人がいる‥*」「*家族にそういったサインを出している人がいる*」のように、予防教育を通して身近な人に関心が向けられていることが分かった。そして、【自殺願望者だけでなく悩んだり苦しんでいる人へのケアと相談行動】では、「*よく相談されたりするので、自殺に限らず心のケアいう形で実践していきたい*」と、「ケア」という用語が記述されていたことに研究者らは驚かされた。

【教材である自死遺族の体験談をきっかけに反省する身近な人との関係性】【教材をきっかけに認識した身近な人を支えることやコミュニケ

ーションをとることの大切さ】【教材をきっかけに自死遺族への理解的態度から見つめ直す家族との向き合い方】では、教材そのものが伝えようとする教育内容、またグループでの意見交換を通して仲間の多様な考え方に気づくことの他に、「*イライラしている時、母にあたってしまう‥気をつけたい*」「*家族が悩んでいる時、冷たくあたってしまうときがある‥話を聞いてあげようと反省することができた*」「‥*もっと身近な人とのコミュニケーションをとろうと思った*」「*家族との会話に気を配ろうと思った*」のように、生徒は普段の生徒自身の家族との関係性やコニュニケーションのあり方を振り返っていたことが考えられた。

【自殺のサインを意識した周りの人への注意や気配り】は、一年目教育後・二年目教育前の＜振り返り＞、及び二年目教育後・三年目教育前の＜振り返り＞の内容に共通するものであると考えられた。【予防教育の内容を周囲に発信】の「*周りの人に(学んだことを)教えられる*」や【人間関係や困ったときの対処等に活かしたい予防教育】の「*自分が困ったと時はため込まず吐き出すことの重要性を学んだ*」「‥*グループの人とよく話し合って‥、自分にはない意見を聞いてなるほどと思った*」からは、予防教育を通して自殺予防を身近でできることとらえていることが分かった。

以上より、生成されたこれらのカテゴリーは、生徒らが予防教育で用いた教材や体験学習をきっかけに、過去の自身の自殺願望や身近な人の自死体験を想起したものを、調査への回答を通してその経験を自己開示し、それを客観視したものであるといえる。そして、普段の生活体験や身近な人との関係性を振り返り内省することで、今後の自身や身近な人の自殺予防に役立てようと認識をあらたにしていると考えられた。

Ⅶ. 結論

山梨県内の 4 高校で年度毎 3 年間にわたり、計 3 回実施した予防教育を受講した生徒が、予防教育を『普段の生活に役に立つ』と肯定的に回答し、その理由の記述が分析指標＜振り返り＞に該当したデータ数 200 を質的に分析して分かったことは、以下の 3 点にまとめられた。

1）一年目教育後・二年目教育前の＜振り返り＞に該当したデータ数は 77 であり、16 個のコード、11 個のカテゴリー【過去の自殺願望や自傷行為から学ぶ自己理解や対処法】【深く悩んだ経験をためずに相談する意識へと変化】【自殺サインを学んで気づく自己の傾向】【あらためて考えさせられた自殺問題や命の大切さ】【身近な人の自死体験に学ぶその人の理解や関り】【深く落ち込む友人を前に戸惑った経験があるから分かった声のかけ方】【身近な人の自殺願望や不登校への対処の内省から高まる自殺予防への関心意欲】【周囲の様子への関心の高まりと気配り】【自身や周囲の暴力的言動や軽率な言動の減少】【周囲の人の変化への気づき・声かけ・相談】【予防教育を意識した生活】が生成された。

2）二年目教育後・三年目教育前の＜振り返り＞に該当したデータ数は 65 であり、16 個のコード、10 個のカテゴリー【過去の自殺願望や悩んだ経験から将来役立つと認識した予防教育】【身近な人の自殺願望や自死という衝撃的な体験からの学び】【身近に自殺願望を持つ人を認知して高まる自殺予防への意識】【自殺する人の気持ちや背景への理解の深まり】【体験学習を活かして自殺予防につなげた経験】【戸惑った経験があるから分かった具体的な対処法】【体験学習を身近な問題・生活に役立つと認識】【周囲の人への気配り意識の高まり】【自身や周囲の人の暴力的言動や軽率な言動の減少】【学びにより高まった声かけや相談行動】が生成された。

3）三年目教育後の＜振り返り＞に該当したデータ数は 58 であり、20 個のコード、8 個のカテゴリー【身近にいるうつ傾向や自殺の

サインを出している人に役立てられると認識した予防教育】【自殺願望者だけでなく悩んだり苦しんでいる人へのケアと相談行動】【自死遺族の体験談(教材)をきっかけに反省する身近な人との関係性】【教材をきっかけに認識した身近な人を支えることやコミュニケーションをとることの大切さ】【教材をきっかけに自死遺族への理解的態度から見つめ直す家族との向き合い方】【自殺のサインを意識した周りの人への注意や気配り】【予防教育の内容を周囲に発信】【人間関係や困ったときの対処等に活かしたい予防教育】が生成された。

Ⅷ．研究の限界と今後の課題

現在、研究者らは所属教育機関から研究協力に承諾が得られた高校や特別講義として申し出があった高校に出向き、生徒に自殺予防教育を実施している。予防教育を通して生徒から意味のある回答を投げかけられても、無記名式の質問紙であるため、その回答の詳細を把握することはできない。また、生徒は無記名式の質問紙だからこそ、安心して＜過去の経験の振り返り＞として自己開示できたのかもしれない。このことが成果であり、研究の限界といえる。

謝辞

本研究に取り組むにあたりモデル校として快く協力に承諾くださいました県内 4 高校の校長先生をはじめとする諸先生方、3 年間にわたり自殺予防教育を受講し、調査にご協力くださいました生徒の皆さんに心より感謝申し上げます。研究者らは、生徒が予防教育を通して学んだとして調査票に記述した言葉とその行間にある思いを推測しながら本稿をまとめた。生徒には自身と身近な友人や家族との関係性を大事にする人へと成長すると共に、自殺を身近で重要な課題として認識し、自殺予防に取り組んでいただくことを願ってやみません。

引用・参考文献

1) 厚生労働省・警察庁：平成 30 年 3 月 16 日発表「平成 29 年中における自殺の状況」,2018.
2) 厚生労働省：平成 28 年における死因順位別にみた年齢階級・性別死亡数・死亡率・構成割合,平成 30 年版自殺対策白書,第 1 章,12,2018.
3) 山梨県教育庁社会教育課:平成 19 年度山梨県「青少年の生活意識調査」,2008.
4) 清水惠子他:青少年を対象とした自殺予防教育の推進に関する研究 1,山梨県立大学地域研究交流センター2009 年度研究報告書.
5) 清水惠子他:青少年を対象とした自殺予防教育の推進に関する研究 2,山梨県立大学地域研究交流センター2010 年度研究報告書.
6) 清水惠子他:青少年を対象とした自殺予防教育の推進に関する研究 3,山梨県立大学地域研究交流センター2011 年度研究報告書.
7) 清水惠子他:青少年を対象とした自殺予防教育の推進に関する研究 3,山梨県立大学地域研究交流センター2012 年度研究報告書.
8) 清水惠子,岡部順子:県内高校生の自殺予防に関連した教育の認識と実施後の学習成果,第 43 回日本看護学会抄録集(看護教育),25,2012.
9) 清水惠子，坂本玲子,大塚ゆかり他：A 県内教員を対象に実施した生徒・学生の自殺予防教育等に関する調査，自殺予防と危機介入，第 34 巻 1 号，19-30，2014.
10) 清水惠子，大塚ゆかり,山中達也,岡部順子：A 大学看護学部生に実施した自殺予防教育とその成果,山梨県立看護学部研究ジャーナル,第 1 巻，第 1 号,1-16，2015.
11) 清水惠子,清水智嘉,山中達也,大塚ゆかり:A 大学生に教養教育として実施した自殺予防教育とその成果,看護学部研究ジャーナル,第 3 号,第 1 巻,2017.
12) 清水惠子，山中達也,大塚ゆかり,清水智嘉,三澤みのり：A 県 B 高校生を対象に実施した初年度自殺予防教育とその成果,第 38 回日本自殺予防学会総会プログラム・抄録集,109，2014.
13) 清水惠子:A 県 D 高校生に実施した自殺予防教育の成果,第 25 回日本精神保健看護学会学術集会・総会抄録集 p130,2015.
14) 清水惠子,清水智嘉,山中達也,大塚ゆかり: A 県 B 高校生に継続して実施した自殺予防教育二年目の成果,第 39 回日本自殺予防学会総会抄録集 p96,2015.

15) 清水惠子,清水智嘉,山中達也,大塚ゆかり: A 県 B 高校生に継続して実施した自殺予防教育三年目の成果,第 40 回日本自殺予防学会総会抄録集 p240,2016.
16) 清水惠子,清水智嘉,山中達也,大塚ゆかり: 山梨県内の高校生に実施した自殺予防教育とその成果,2013 年度～2015 年度科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究)報告書,2015.
17) 阪中順子:子どもの自殺予防 生徒向け自殺予防プログラムを中心に,児童青年精神医学とその近接領域,52(3),295-300,2011.
18) 朝日真奈,小坂浩嗣,本田真大: ネットいじめと自殺予防教育,【自殺予防と精神科臨床-臨床に活かす自殺対策-Ⅱ】,精神科治療学,30(4),529-534,2015.
19) 阪中順子:学校における自殺予防教育の実践からみえてきたもの,【自殺対策の現状】,精神医学,57(7),539-545,2015.
20) 阪中順子: 学校における自殺予防教育,【子どもの自殺をめぐって】, 児童青年精神医学とその近接領域,56(2),190-198,2015.
21) 佐藤由佳利:学校における子どもの自殺予防プログラム,学校臨床心理学研究,11 号,19-25,2014.
22) 阪中順子: 自殺予防教育『子ども向け自殺予防プログラム』について,【子どもの自殺を予防せよ!】,学校保健研究,57(6),297-299,2016.
23) 阪中順子: 学校における自殺予防教育,【学校と精神医学】,精神科治療学,31(4),471-477,2016.
24) 川野健治:自殺予防教育プログラム GRIP の開発,心と社会,48(1),71-76,2017.
25) 小西季代子,三輪秀文:「自殺予防教育」(いのちの学習)に取り組んで,特集;子どものための自殺対策,自殺予防と危機介入,37 巻 1 号,p15-22,2017.
26) 川野健治,勝又陽太郎,白神敬介,小令三,福地成:中学校における自殺予防教育プログラム GRIP,2013.
27) 川野健治:中学校での自殺予防プログラム GRIP の構成,国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所年報,27 号,p238,2014.
28) 川野健治,白神敬介,勝又陽太郎,川島大輔,荘島幸子:学校における自殺予防プログラム背景と概念の構成,第 78 回日本心理学会大会発表論文集,p1173,2014.
29) 白神敬介,川野健治,勝又陽太郎,川島大輔,荘島幸子:学校における自殺予防プログラムプログラム実施による中学校生徒への効果,第 78 回日本心理学会大会発表論文集,p1175,2014.
30) 川野健治:子ども・若者の自殺予防 学校における自殺予防教育, 第 57 回日本児童青年精神医学会総会抄録集,p45,2016.
31) 白神敬介,川野健治,勝又陽太郎,川島大輔,荘島幸子:中学校における自殺予防教育プログラムの達成目標についての実証的検討,自殺予防と危機介入,35(1),23-32,2015.
32) 高橋祥友編：青少年のための自殺予防マニュアル新訂増補, 金剛出版, 2008.
33) 木下貴志:自死遺族の体験談,平成 21 年版自殺対策白書,p87-88,内閣府,2009.

The positive responses from high school students about the usefulness of Suicide Prevention Education in everyday life: Reflections on their experience

SHIMIZU Keiko, MISAWA Minori

key words: High school student, Suicide Prevention Education, Questionnaire,
The positive response , Reflections on their experience